

測ること・活かすこと

- 第6回 -

藤原 靖也
(ふじわらのぶや)

「シルバー・バレット」を 探し当てる難しさ

ヨーロッパの慣用語に「シルバー・バレット」という言葉があります。直訳すると「銀色の弾丸」です。これは、降りかかる困難を一気に克服できるもの、あるいは方法を表す言葉です。端的に言えば、核心的なところを一気についでしまうものを表します。

組織の管理と数値とを結びつけようとする管理会計もそうですが、測ることに関心を寄せてきた学者にとって「シルバー・バレット」は永遠のテーマでもあります。

果たして測定には「シルバー・バレット」はあるのでしょうか？

これは今のところですが、明らかに

「No」であるという答えしか出せません。例えば気温も条件が違えば測定に誤差（ズレ）が出ることは昔から明らかになっています。さらに体感気温ともなると、湿度や風の強さや日照の程度により変わり、さらに人によって感じ方が違うため一概には測れません。当たり前といえども当たり前かもしれませんが、核心的な部分を一気に突ける測定道具はありません。

これは経営でも、家計でも同じです。これから皆さんに考えてほしいことは、経営や家計に「シルバー・バレット」がない—正しい基準や測定できる道具がない—ことによって、何が企業や家の舵取りにとって本当に重要なものとして機能するのか、ということなのです。机上の空論のように聞こえるかもしれませんが、とても大事なことだと私は思っています。

極端な例を一つ出しましょう。大学です。この難しい組織には「シルバー・バレット」はありません。大学の成果や舵取りのための数値を何で測ればよいのかも分かりません。少なくとも学生の人気というものだけを測定すればよいものでもないし、研究成果ばかりを測定してもいけないし、教育成果ばかりを測定してもいけない中で、複数の選

択の中からこれが大事だという何点かの数値に絞り込まなければなりません。非常に難しい作業です。さらにいえば、その測定数値の数は、議論はありますがある程度の数に絞られていなければなりません。数字がやたらに多いと人は適切な判断ができなくなるからです。

このように何を目安にして良いのかハッキリしていない一方で、測定できなければ管理ができません。数字者でさえ、数字は絶対だとは言っていません。ハッキリしないものであり、反証があることが起こり得るからこそ、数学という学問が今あることを認めています。数字は、絶対ではないのです。

それを認めつつも、私たちは管理のために「シルバー・バレット」を探さなければなりません。誤差はあれども銀の弾丸を打ち込むという意味で有用であればよいのですが、あなたの組織では何がシルバー・バレットだと認識されているのでしょうか？それは、本当に機能しているのでしょうか？それだけの方がそもそも知っているのでしょうか？

測定には、非常に難しい問題がまだまだ潜んでいるのです。

(和歌山大学経済学部 准教授 博士(経営学))

和歌山大学岸和田サテライト

後期開講予定「豪雨災害とその備え」開講のお知らせ

秋から始まる和歌山大学岸和田サテライト後期学部開放授業では、「豪雨災害とその備え」の開講を予定しています。あなたも南海浪切ホールにある和歌山大学岸和田サテライトで防災について学んでみませんか？詳しくは、ホームページをご覧ください。

お問合せ先 >>> 和歌山大学岸和田サテライト
〒596-0014 岸和田市港緑町1-1 岸和田市立浪切ホール2階
電話/FAX: 072-433-0875

岸和田サテライト 検索

